第一線の人びと

島の分校にて

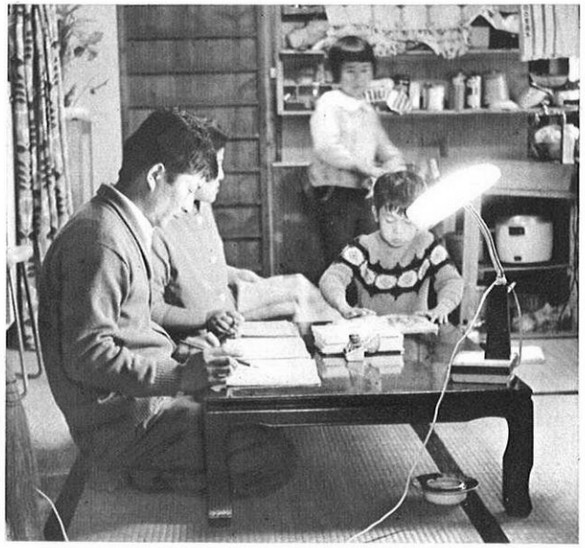
島の分校 ── この言葉にはロマンの匂いがある。明るい空、青い海、そして先生と手をつないで浜辺を馳けまわる子供たち……。

天草島の中の“陸の弧島”ともいえる向辺田分校にも青い海が緑の山に、浜辺が山道にかわってこそいるが、先生と子供たちの明るい心のつながりは想像を裏切らない。

しかし、その蔭には、T先生夫婦の真しな努力が注がれているのである。 （記事は次頁）

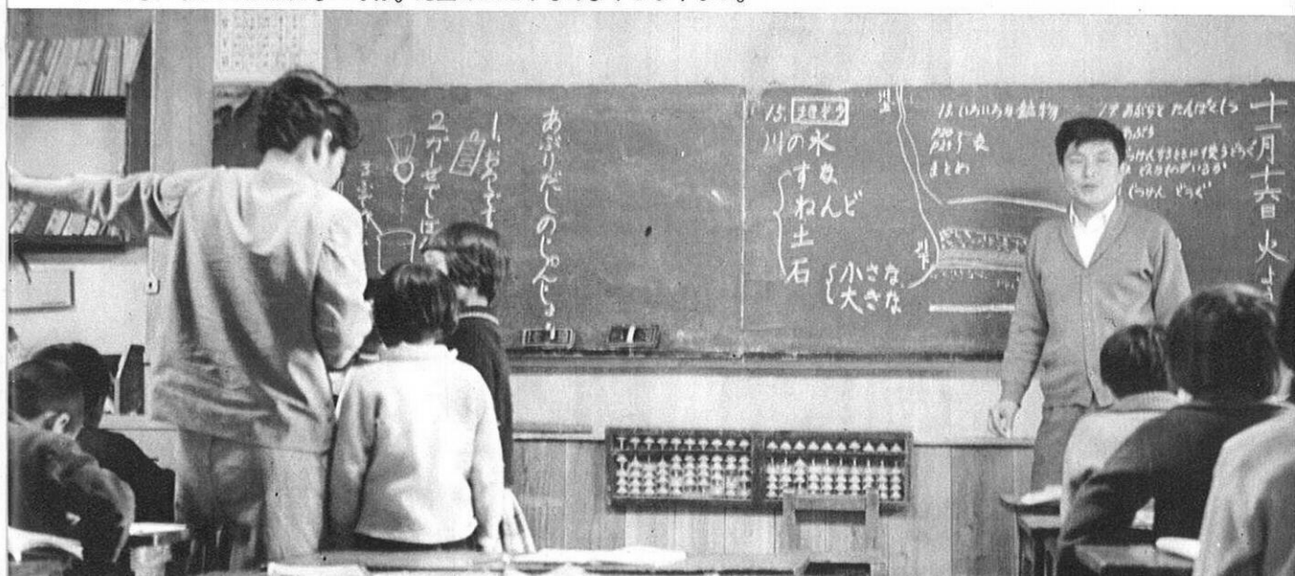
上・島の奥地では自然のバラエティもとぼしいが…

左・生徒の小さなケガの手当ても家庭的になる



上・わが家の「補修授業」がはじまる……

下・せまい教室では黒板も二等分。先生の立廻りもめまぐるしくなる。



＜第一線の人びと＞

分校の先生

■天草郡大江小学校
向辺田分校

〃天草の乱〃のキリシタンの旧蹟を、今にとどめている天草下島の西端、天草町大江。

この大江と波静かな羊角湾をはさんで、天草の飛地がある。その名も辺地性を示すかのように向辺田といい、ここに大江小学校向辺田分校がある。もっと正確にいえば、大江の本校から三九㌔。河浦町を通り抜け、さらに牛深市亀浦から天草灘に向かって、約四㌔の山道を登りつめたところである。

家族的な学習風景

「土のかたまりに、縞模様があるのはどうしてだったかな？」とT先生。「ほら、お日さまは、どの方角から昇って、どちらに沈むのかしら？」とM子先生。勢いよく、子供たちの手が上る。二〇坪そこそこの小さな教室での五年生と二年生の理科の勉強風景である。ほかの学年の生徒は自習に余念がない。

分校の先生は、このT先生とM子先生の夫婦二人だけ。そして生徒はみんなで三七名。三年生以下はM子先生、四年生以上はT先生が担当する複々式授業である。

先生夫婦が、当時一つと四つになる二人の子供を伴なって、八代郡の小学校から、この分校に赴任してから既に三年に近い。〃一つの学校で、夫婦協力して、家庭的な温かみのある学習指導を〃と、先生夫婦が希望した分校への赴任であったが、想像以上の辺びさにまず度肝を抜かれた。しかし、いかにも自然に明るく生きる生徒たちの雑草のようなシンの強さに、逆に先生一家は励まされていった。

補修授業への熱意

辺地は、どうしても文化に恵まれにくく、刺激も少ないだけに、自然、分校の生徒の学力や体力も劣り勝ちである。子供同志の競争心も少ない。従って、学習の上での先生夫婦の悩みもこの点に集中されてくる。赴任一年目、少しでも多く生徒の能力を引きだそうとする努力と、それになかなか反応を示そうとしない子供たちへのあきらめ。これらが絶えず交叉して、先生夫婦をつかみどころのない焦らだちへ駆り立て、夫婦で口論し合うこともしばしばだったという。

それを解決する手段として、先生は補習授業をとり入れることを考えた。正規の授業時間だけでは、追いつくのに時間が不足するからである。補習授業の狙いは、おもに生徒の意欲作りに重点がおかれている。たとえば、漢字を覚える問題。これを百点をとるまで二回、三回と同じ問題を与える。そして、遂に百点をとった生徒の喜びは、次の問題で、また百点をとろうとする意欲へ変る。赴任当初より今は授業をしていく上で、ずいぶんとテンポが早くなったという。

こういった学習上のあい路の克服もさることながら、先生自身の立場でのあい路もいろいろと多い。

「ともすれば、大江小学校の先生であるという意識がうすくなり、取り残されていくような空虚感を覚えるのですよ。」とT先生は本校との交通の不便さを訴える。そして先生自身の〃補修授業〃の必要性を感じ先生夫婦は、いま大学の通信教育に取り組んでいる。

教育と生活の〃広場〃として

島の生活の中で

部落の全戸数は三六戸。一昨年頃から部落の男性がめっきり減った。部落の人たちの殆んどは、炭焼きを主体に生活を営んできた。いまはその収入も少なく、男達は、やむを得ず出稼ぎに出て行く。残るのは老人と母親である。当然、村人は、先生を頼りにする。冠婚葬祭から薬の世話まであらゆる生活の相談ごとが、分校の先生に持ち込まれる。分校は子供たちだけでなく村人の寄合の場でもある。いいかえれば分校を中心に部落という歯車が廻っているともいえる。

先生と子供たちの心の結び付き。これは分校ならではの切実さがある。生徒数が少ないので、しつけにしろ、学習にしろ心ゆくまでの指導ができるのである。

分校の子どもたちの楽しみは少ない。それだけに秋の運動会と、部落の天満宮で行なわれる子供相撲は、部落総出のオンパレードなのである。

夏休み前と学期末に、校庭にカマドを作り先生と子供たち全員で会食する時の子供たちのうれしそうな顔はいいあらわせない程だという。だがその校庭とは名ばかりでボール一つかっ飛ばせない。

悪いことに、八月の十五号台風で校舎がこわれ、いまのところ仮校舎住いだが、新しい鉄筋コンクリートの校舎が、ことしの三月までには建つ見込みである。

× ×

こうした辺地の学校は県下の小中学校合わせるとかなりの数にのぼるが、そのいずれにおいても、地理的、社会的な悪条件にめげず先生と生徒と、そして部落の人たちとの強い心の結びつきの上にたった教育がきょうも行なわれているのである。